

氏名	本山 八重子
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第584号
学位授与年月日	2022年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	後土御門・後柏原・後奈良天皇主催着到和歌の研究
審査委員	(主査) 加藤 睦 (立教大学大学院文学研究科教授) 水谷 隆之 (立教大学大学院文学研究科教授) 高松 亮太 (東洋大学文学部准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序章

第一部 着到和歌について

第一章 後土御門朝以前の着到和歌について

第二章 文明期から永正期の後土御門・後柏原・後奈良天皇主催着到和歌について

第三章 文明一二（一四八〇）年九月一日起日の禁裏着到和歌について

第四章 文明一三（一四八一）年九月一日起日千首着到和歌について

第五章 文亀三（一五〇三）年三月三日起日禁裏着到和歌について

第二部 個別の着到和歌

第一章 文明一五（一四八三）年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌について

第二章 文明一九（一四八七）年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌について

第三章 宮内庁書陵部本『点取和歌部類』①「秋二十首・冬十首」「雑二十首」和歌について

第四章 永正一〇（一五一三）年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌について

第五章 永正一三（一五一六）年三月三日起日知仁親王主催着到和歌について

第六章 永正一四（一五一七）年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌について

第七章 永正一六（一五一九）年三月三日起日伏見宮貞敦親王着到和歌について

第八章 高松宮旧蔵「後奈良院詠御着到和歌」について

終章

表 後土御門・後柏原・後奈良天皇主催の着到百首

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は、室町時代後期の文明期（一五世紀後半）から天文期（一六世紀前半）に在位した、後土御門・後柏原・後奈良三代の天皇（親王時代も含む）主催による着到和歌を対象とする研究である。着到和歌の研究は、近年顕著な進展を見せてはいるが、当時の日記史料などに基づく全体像の解明は途上にあり、着到和歌の興行の実態も不明な点が多い。そうし

た研究状況を踏まえて、本論文では、着到和歌に関係する記事を、諸史料から収集し、編年体に整理して提示するとともに、これまで研究対象とされてこなかった伝本資料を蒐集・検討して、着到和歌の主催の歴史とその興行実態を考察している。

第一部では、第一章で、後土御門天皇践祚以前の着到和歌の歴史を、古記録や伝本資料の検討を通して検討する。第二章では、現存する公家日記などから、後土御門・後柏原・後奈良天皇主催の着到和歌の催行記録を収集して、編年体でまとめ、着到和歌の作法、参加資格、目的などを個々の記事を基に推測するとともに、関連する資料の翻刻・紹介を行っている。第三章から第五章では、すでに先行研究が存在する着到和歌について、詠草類、抜粹詠歌等の新たな資料の存在を確認し、着到和歌興行の前後の様子も明らかにする。第二部では、全体を八章に分ち、それぞれ、先行研究では取り上げられていない開催年時不明の着到和歌の伝本および「点取和歌」に部類されている個別の着到和歌由来と推定される写本・伝本の整理・確認等をおこない、資料の分析と史・資料の突合などを通して、催行年時不明な着到和歌の比定を試みている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

着到和歌の研究は、申請者を含む複数の研究者によって、近年目覚ましい進展を見せているが、個別資料の紹介・分析においては未開拓の部分が残し、全体像の把握・提示という点においても、修正の余地があるのが現状である。本論文は、そのような研究状況を踏まえて、①後土御門・後柏原・後奈良天皇主催着到和歌に関する記録類を博搜・整理し、そこから宮中における着到和歌催行の実態を考察するとともに、②先行研究において対象とされて来なかった資料を蒐集して、実証的に分析を加え、新たな知見を提示したことに特徴がある。①②を通して貫かれているのは、宮中における着到和歌は、どのように行われていたのか、またその意義は何であったのか、それを具体的に突き止めてみたいという志である。

①記録類の博搜・整理を通しての考察においては、現存する古記録などから、後土御門・後柏原・後奈良天皇主催着到和歌の関連記事の全てが抜き出され、個々の着到和歌ごとに時系列に沿って整理が行われ、分析がなされており、巻末付表にその要点がまとめられて

いる。宮中の着到和歌の催行の記録が初めて年次順に整理されたのは、画期的な業績と言える。また、多くの着到和歌の催行の様子を比較・検討することによって、催行の実態が明らかになった点も多い。

②資料の収集・分析においては、学界未見の伝本資料の紹介・考察を行うとともに、従来影印が刊行されて誰でも見ることができる状態であった資料の中から、着到和歌の資料とは俄かに分からない資料を複数取り上げ、他の資料・史料との突合を通して、それが着到和歌の資料であることを推測している。また、詠進の実態を明らかにする分析も行われていて、やはり学界への貢献は大きい。

(2) 論文の評価

前項（論文の特徴）にも記したように、本論文は、後土御門・後柏原・後奈良天皇主催着到和歌に関して、記録類の博搜・整理と、伝本資料の蒐集・分析を通して、着到和歌研究に多くの知見をもたらしており、学界に対して大きく寄与するものと評価される。記録類の分析からは、たとえば、①構成人員から見ると、公式の歌会というより、私的な要素を含んだ準公的な歌会に位置するものと考えられること、②天皇と皇太子が同日に着到和歌を開始することもよくあるが、その場合の構成員は原則として重なることはないこと、③二日目以降は毎日詠進しなくても許されたようであるが、部立（春・夏など）の最終日の詠進は期日が守られていたようであることなど、これまで部分的に漠然と想像されてきたことが、確度を高めて把握された意義は大きい。また日記類からは、天皇、廷臣たちが詠進以前に、三条西実隆など歌壇の重鎮から添削・批評を受けている様子が見られるが、第二部の複数の章において、その詠進の過程が具体的な和歌の選択、添削の様子によって明らかにされていることは、第一部が催行の儀式的な側面に重点が置かれがちな欠を補う意味においても、同時代の和歌詠作の実態に迫る意味においても、貴重な業績と評価される。

対象を天皇主催の着到和歌に絞っていること、同時代の歌壇全体への目配りが不足していることなど、残る課題はあるものの、上述した本論文の意義は大きく、着到和歌研究ならびに同時代の和歌研究のための揺るぎない基盤を築いたものとして高く評価できる。